

## アイコンをつくる

—貞照寺と貞奴縁起を中心に—

森田 雅子

(武庫川女子大学生活環境学部生活環境学科)

## Icons for Sadayakko

:<Icons>for self-display at Teisho-ji and Futaba-goten

Masako Morita

*Department of Life Environmental Sciences*

Sadayakko built the Narita-san Teisho-ji Temple in 1933, a memorial for herself and loved ones. There are eight wooden reliefs with tituli affixed to the exterior wall of the apse, illustrating how the miracles of the buddhist divinity, Acala (Fudou-Myou-ou) had elevated Sadayakko from disaster. These reliefs seem to be inspired by the typological vitae of the saints adorning so often the portals, as well as the stained glass of the church chor in Western Europe, where Sadayakko was on tour. Sadayakko's life as Momosuke's mistress and manageress of the famous "Futaba-goten", their residence, began in Nagoya as she retired from her activities as an actress; and ends with his final and fatal illness as Sadayakko leaves Nagoya for good.

### 1. はじめに:川上貞奴と貞照寺

川上貞奴は女歌舞伎禁止以降約300年を経て現れた日本の女優第一号とされている。本論は、昭和8年(1933)に62歳の貞奴が建立した成田山貞照寺(岐阜県各務原市宝積寺町)の本堂を飾る堂羽目の彫り物にまつわる物語とアイコンを文化社会学および図像学的観点から分析し、貞奴の文化的意義を再考するものである。

この堂羽目には<貞照寺縁起>と同時に<貞奴八霊験>の物語が彫られている。不動尊が貞奴にもたらした<霊験>なのである。また貞奴が大正7年<1918>から昭和12年<1937>まで福沢桃介と同棲した<二葉御殿>などに見受けられる貞奴の遺品との比較をして共通項をさぐる。

成田山貞照寺は成田山不動尊信仰の深さをものがたる記念碑である。背景には貞奴の歌舞伎界の市川宗家を中心とした成田山不動尊に対する元禄以来の深い結びつきに対する憧憬もある。同時に川上家とは福沢桃介との同棲故にうまくいっていなかった。貞照寺は、福沢桃介との過去の記憶を暖め、祀り、最後の骸の置き場を確保するという説を私はとる。この寺を建立したのも貞自身の意図ではなかったと孫の川上初氏はいふ。第一女が寺を建立するということには当時も何かと耳目を傍だてたという。貞の将来を心配して、養子を取る事を勧めたのも桃介であって、これは子ができぬ貞奴に気を使い、自分の血筋の岩崎家の親戚筋のものを招請したわけである。寺の建立は福沢桃介・貞奴二人の強固な意思であったと考える。堂羽目の銘文にはダムを「福沢桃介氏の為、一身犠牲の念願を籠め、空前の工事を完成せしむ」とあり、功績の主体は貞である。つまり、本堂の堂羽目の木彫りは<貞奴八霊験>と同時に寺の設立由来<貞照寺縁起>

(森田)

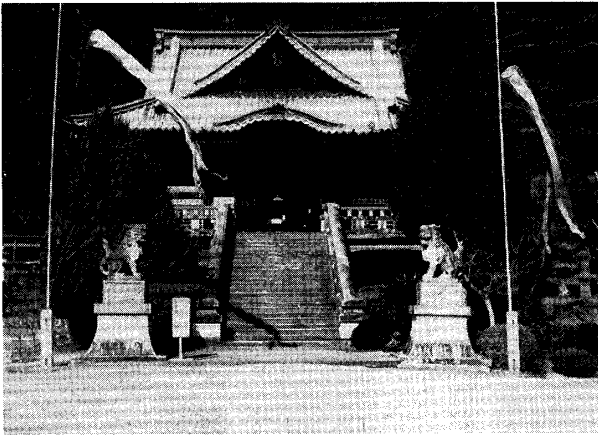


Fig. 1. 成田山新勝寺大本山 末寺貞照寺

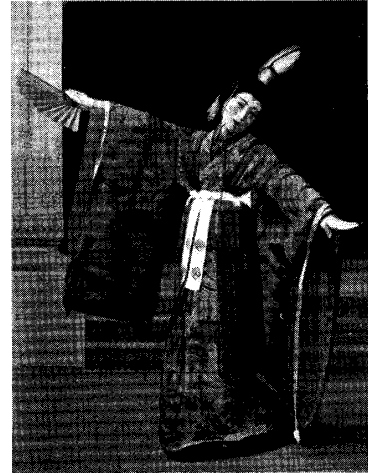


Fig. 2. Le Théâtre 1900 表紙を飾った  
貞奴の巴里万国博での踊り姿

も語る。貞奴と二人三脚の結果、桃介は木曾にダムを造成し、名古屋における電力事業の基礎を築いた。今日貞奴の墓所は貞照寺本堂裏の塚山にえぐられた石室にある。以下、貞奴の伝記の詳細については主に山口玲子『女優貞奴』(1993)、孫の川上初氏のヒアリング、および欧文・和文の新聞記事、遺品等の分析によるものである。

## 2. 貞照寺堂羽目と貞奴

貞奴の菩提寺成田山貞照寺本堂は極めて単純な造りである。伽藍は仁王門本堂、客庫裡、貞奴縁起館、貞奴墓所、墓所を見守る三十六童子、弥勒菩薩、稲荷神社、檀家墓地、水子地藏、智水(弁天)池などで構成される。

入母屋造りに据破風、銅瓦葺き、軒唐破風の屋根や組物は大本山成田山新勝寺本堂(現釈迦堂)の造りを模したものである。釈迦堂と貞照寺本堂を比較すれば、貞照寺の方が造りは質素で、釈迦堂の方が飾り金具の使い方、軒周りの仕様など優美で潇洒な味わいがある。特に向拝の虹梁の彫刻を翼形の雲塊としたところが特徴的である。貞照寺の基礎も組物も鉄筋コンクリートの構造物であると思われる。

桁行、梁間ともに5間。このコンクリートの基礎はもちろん本堂北側の塚山墓所の土砂災害、つまり〈蛇抜け〉に対抗するためでもあったのだろう。正面、側面共に腰高障子の引戸があり、裏側北面には観音開きの板戸がある。簡明ですっきりとした柱間装置の構造で飛貫と腰貫、円柱に囲まれた堂羽目がある。その上には飾り気のない小壁があり、組物がある。軒廻りは二軒である。貞奴八霊験図は本堂に向かって左の西面の堂羽目ではじまり、北面、そして東面と続き貞奴の生涯の中から八つの場面が描かれている。全ての場面には以下の題字が添えられている。

「養母病魔に臨み、十二歳の貞女酷寒の深夜、水垢離を取り尊號を念誦して、その快癒を不動明王に縋るや靈験忽ち難病を直す」

「成田遠来の途、貞女を乗せし奔馬、野犬の群に襲われて絶壁に追い詰められし時、不動明王を念ずれば、不思議やアワヤと云う瞬間後退して難を免がる」

「貞女十九歳の時、箱根山中の宵闇、悪漢に囲まれ落花狼藉と思われし時、不動明王の威徳忽然一名の普化僧を現わし怪漢を追い給う」

「貞女廿一歳、上野池の端、武徳会騎馬乗幌引に出場、柳に幌懸りて落馬し馬の下敷となる。されど佛光無量、遂に微傷さえ負わず」

「貞女の夫、音二郎、鹿を中原に争って落つ。憤然、悽愴たる相模灘に二間餘の小舟にて冒航す。仏威

廣大辛じて下田へ漂着す」

「貞女夫妻，志州鳥羽沖舟行中海驢<sup>あしか</sup>鳴附近にて海驢の群に襲わる．専念，不動明王を念祈して防げば怪獸仏威に打たれて去る」

「貞女卅一歳の春，一座歐洲へ興行談纏まり，其旅費を受取り奔走準備中，神戸にて俵内に遺失したれど，日頃の祈念に恙なく手中に戻りたり」

「大正十三年頃，木曾川を横断してダムを築き，水力電気を起さんとする福沢桃介氏の為，一身犠牲の念願を籠め，空前の工事を完成せしむ」

貞奴は仏殿の羽目板に敢えて自分の女優としてのキャリアではなく，生涯の伴侶たちにもたらされた不動尊の奇跡を中心に描こうとした．本山の成田山新勝寺旧本堂を装飾する二十四孝の列伝でや五百羅漢はなく<sup>り</sup>，自分の生涯に取材した．これは日本的範疇から言うとかかなり特異なことである．

### 3. 西洋的絵解きの要素: 聖人の靈験縁起

ここで西洋的な図像学〈絵解きの様式〉という側面から八枚の堂羽目を分析する．

貞奴を照らす〈神託〉を現す光線の束は，紛れもなく西洋の図像からの影響を受けている．特に仮説として提示したいのは，神の神託と寵愛を示す御手から広がる光の束である．これは同時代の錦絵等からも見て取れるが，西洋の宗教画や透視図法などの影響があるといえる．雲文は東洋の図像では龍を暗示するとされるが，洋の東西を問わず，神格が雲海に表れることはよくある．しかし，神の手，あるいは不動尊の姿の代わりに雲文を流用するのは貞奴の意図と工夫と考えたい．

貞照寺堂羽目は貞奴が欧米渡航の際に見た西洋の教会などの壁画やステンドグラスの模倣である．キリスト教の宗教観では全ての聖人の功德と奇跡はキリストの事蹟の前兆であり，残照である．西欧の教会の内陣のステンドグラスや祭壇，説教壇周りの彫刻が見せる〈絵解き〉の様式-そこにはヨーロッパ的伝統に従い寄進を奉納した信者の跪く小さな姿と共に，信仰の対象の聖人達の奇跡や功德の生涯が示される．これらの壁画やステンドグラスは numerological (数秘的)あるいは typological (予表論的)な世界観に裏打ちされた聖人の奇跡にちりばめられた生涯を表す教具であり，出生，幼少期，殉教，昇天に至る生涯をわかりやすく絵で説く．最も著明なものはシャルトル大聖堂のステンドグラスや彫刻，そしてエナメル装飾板に覆われたクロスターノイブルクのサイクルなどとされる<sup>2)</sup>．この場合は聖人自身の功德を再現し，かつ聖人の功德を通じて現れる神の威光を示すのが目的であり，寄進者が明確であるものも少なくない．



Fig. 3. 雲文から発光する光芒のディテール

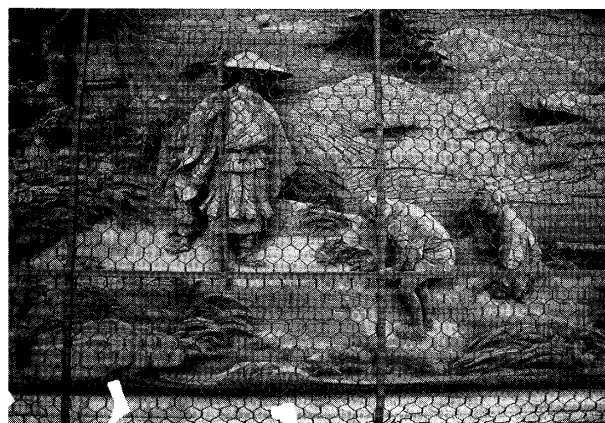


Fig. 4. 貞照寺堂羽目「落下狼藉」

日本の宗教画には寄進者の姿が描かれることは稀であるといえる．靈験の主体の聖人であると同時に寄進者でもある貞奴．堂羽目の浮き彫りに貞奴が毎回登場しているというのも特異といえるし，その上銅版と木札の銘文で，意味不明瞭なることを避けるために，各場面二つづつ題字が据え付けられている．題字は特別の慈悲と信託と寵愛をの靈験が現前するパターンをくり返す．何故八回も靈験の冥加に預かるのか．表面的な筋立ては，靈験の〈論理〉で，祈祷や信仰がもたらした御利益なのであり，貞自身の生



Fig. 5. サンドニ大聖堂内陣のステンドグラス：  
ステンドグラスを捧げて跪く寄進者  
修道院長スジェリウス

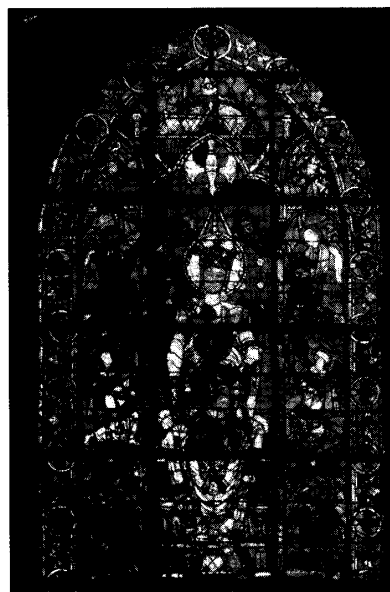


Fig. 6. シャルトル大聖堂内陣南袖廊ステンドグラス：  
聖母マリアとキリストくセーデス・サピエンティア  
エ)三位一体を表す聖霊から発する三条の光芒

来の徳ではなく、信仰対象である不動尊の威光の証しとなるに過ぎないはずである。「八」といえば、日本の仏教観の中では、実は無限大や無尽蔵を表す数と見てよい。例えば八大菩薩，八大明王，八部衆，八熱地獄などである。これでは不動尊の佛威が甚大であるというよりはむしろ、貞奴の功德が無限大であるという解釈でも成り立つわけである。

#### 4. 水力発電事業への御加護発願

貞照寺八番目の堂羽目のダムの上に現れる不動尊は磨いた跡がある。回りの黒ずんだ浮き彫りの雲気文の地よりはっきりと浮き上がって見える。目視では、不動尊の身体を懸命に磨いた跡の様にに見える。敬虔な信者の行為であろうか。手に蓮華を持つこんがら羯羅童子と半跏して金剛棒を持つせいたか制呬迦童子が脇持として控えている。また貞照寺で販売されるくしおりに掲載される如竹の原画をみるとよりはっきりするが、台座より溪流が流れ出している。<sup>\*</sup>

成田山新勝寺本堂伝来の不動尊像もまた、この凶像に従っている。これは先ず第一に新勝寺に祠しているところの不動尊を「頼り参らせた」ということである。この海中、あるいは水流を伴う不動の一番初期の形式のもの所謂『波切不動尊』に類似するとされ、弘法大師が帰朝する際に作らせたものとされる。そして『水難』とみなされた蒙古襲来のとき、光背のご利益に預かるため、取り外して西へ持ち去ったという。この蒙古襲来以降、西日本、裏日本の各地で『波切不動尊』などのように、台座に海を装飾した不動尊が増えたという<sup>3)</sup>。新勝寺の不動尊の台座の場合は、海中に岩座があるというよりはむしろ整然とした台盤の格狭間より流れ出る水流は溪流の様にみえるのが気になる。同様の台座に座す不動尊を描いた江戸期の絵馬が現在成田山雷光館に保存されている。<sup>4)</sup>また、成田山ゆかりの錦絵『成田山靈験図』<sup>5)</sup>をみ

\* 台座中央から湧き出るのは法水であろうか。「聖無動尊大威怒王秘密陀羅尼經」(鈴木尚訳)は不動尊の属性を次のように記述している。

「智慧の火を持って諸の障礙を焼き、亦法水を以って諸の塵垢を漱ぐ。或いは大身を現じて虚空の中に道、或いは小身を現じて衆生の意に随う。金翅鳥のごとく諸の害悪を噉い、亦大竜の雲を興して法雨を灑ぐ。」「即ち大定の徳を以っての故に金剛磐石に座し、大智の徳を以っての故に迦楼羅の焰を現じ…其の形青黒にして暴悪の相に似たり。」安達原玄、『写仏下絵図像集』、第3巻 不動明王、日貿出版社、東京、pp.14-16(1992)

ると、いずれも不動尊と二童子の来迎を表すのに雲気文で構成された乗物、背景全面にはいずれも激しく流れ落ちる滝があり、その前で歌舞伎役者扮する不動尊と二童子が〈現前〉している。

全国的にみても、滝の不動にまつわる信仰は多い。また滝と不動は激しさの面で連想上結びつけ易いのだろう。そして銘にあるとおり、不動尊を祀る動機はダム事業が成功したからであるという。つまりこの水力ダム事業の守護神としての位置付けが大きいと思える。それを電力の重要な送電先である大都市名古屋と供給源である木曾川水系を見守る鵜沼に建立したのであり、発願の経緯は感謝と同時にさらなる加護の祈願であると考えられる。貞は、築地から神戸まで太平洋岸沿いの小舟航での逃避行といい、三度の欧米渡航といい、大正11年頃からのダム建設といい、水にはご縁があったわけであり、信仰は深まっただけに違いない。水難からの救済と貞照寺縁起は結びついている。

日本人の民衆信仰の中では、大日如来の化身不動尊は帰朝した弘法大師の齎した神格である。それは大師が海難を乗り越えたことと結びつき、平将門の乱の平定、蒙古襲来撃退の歴史的転回によって民衆の連想の中で国難の排除に結びつき、さらに土着信仰や豊饒の信仰と結びついて、カルラ炎が燃える後光に縁取られた姿とは不思議な矛盾をみせつつ、滝壺を護る不動信仰が広まったのではないか。この不動信仰は全国津々浦々滝といえ、<sup>6</sup>「お不動さん」が祀ってあることが非常に多い事からもうなづけよう。成田山新勝寺には後世、男滝、女滝などと、元々なかった滝が設けられ、信者の思いに応えた。貞奴の建立した貞照寺では、堂羽目の不動尊は勿論新勝寺の図像に倣っている。欧米渡航の海難を逃れたり、水利権を入手してダムを建設したのだから、いかにも台座から奔流が溢れる不動尊は貞に相応しいと思える。

## 5. 仏師半次郎

貞照寺本堂不動尊の彫刻を依頼されたのは小川半次郎である。極めて稀有な性質の持ち主で、信心深く、不動尊全体が完成する前に修業中に溺れて死んだとされている。彼は千葉香取郡の出身で、雲照寺に縁深い真戒和上の紹介で、木曾まで不動を彫りに来た。桃介達は古い民家を移築して、南木曾の二人の別荘近くに仕事場を与え、そして別荘の管理人一家に世話をみてもらったという<sup>6</sup>。いずれにせよ、この不動尊彫刻の依頼の状況や、仕事場の準備の過程などによっても桃介が貞奴と同等にこの寺の建立に関っていることはよくわかる。南木曾町の福沢桃介翁記念館には多少の資料が保管されているが、いずれも桃介と貞奴の思い込みを語るものばかりである。この不動尊は何人も見てはならないと桃介は文書に書き記していた。本堂や写真の像を拝見するかぎり、この不動尊は一木造りで、彩色されておらず、極めてアルカイックな素朴な味わいのものである。後光や光背の部分であれ、衣文であれ、流麗雅な仏画の様式ではなく、<sup>7</sup>朴訥な風合いである。

成田山貞照寺の不動尊像はどのような系譜を背景にもっているのであろうか。彫刻をした仏師小川半次郎の作風は、質朴、粘り強い風合いのものである。流麗な優美さや装飾性はぬぐい消されていて、まことに剛直な感じを受ける。現在の新勝寺の不動尊もやはり木彫りであり、台座からは上述のように滝が溢れ出ている。貞照寺の不動尊の台座から滝が溢れ出ているかは未確認である。しかし貞照寺の不動尊の台座に水流は彫りつけられていないだろうと推測する。なぜならば、半次郎は余計なものは彫りつけそうにならない仏師に思えるからである。遺稿なども示すように、密教に関する独特の深い帰依思想を持っていた<sup>7</sup>。招聘された経緯からしても、堂羽目の浮き彫りなどに現わされている貞照寺全体の図像的プログラムとは全く別格の存在である。

## 6. 阿弥陀来迎図や絵馬との共通項

第八番目の霊験場面では不動尊は雲気文、靈芝雲気文で構成された雲隗に乗り、跪き、祈りを捧げる大井ダム堤上の貞奴に影向している。これは明らかに阿弥陀来迎図や成田山新勝寺に伝わる絵馬などに模範がもとめられよう。

他のいずれの堂羽目でも不動尊は場面に現れず、代わりに飛来した一隗の雲気文から貞奴や登場人物に

向う光をあらわす束(光芒)を使い、不動尊の靈験、寵愛と信託を表している。西洋中世キリスト教美術以来の(神の信託)を表す(神の手)や、天使が福音を伝えたり、天蓋や聖霊をあらわす鳩などから照射される光によって神の寵愛と信託を表す図像に依拠すると考える。

龍が光線を吐き出した様な雲気文と光芒によって靈験を伝えられる貞奴。如竹の原画と比較すると、浮き彫りの方ではかなりストーリーごとの画面が圧縮されている。これは木彫りとして、目視で鑑賞に堪え得る細工の細かさに限界があり、絵画の持つ場面の広がりを一瞬にしてストーリーを捕えられる様に多少簡略化して圧縮する必要があったからだろう。空間的な広がりも美麗で雄弁な彫刻の見せる重層の技の奥行きに引き継がれていく。貞奴はどの場面でも不動尊を一心不乱に祈祷し、靈験に驚愕し、感謝し、感応する主人公として、一番目立つ、立体的な位置に来ている。

## 7. 祈願成就の絵馬:靈験と自伝の融合:歌舞伎役者と成田山不動尊信仰

新勝寺の江戸の出開帳で、餅撒き、興行、絵馬奉納などに人気役者を採用し好評を博した。また元武家出身の人気役者の市川団十郎が檀家となり、さらに成田山の運気は上り調子になった。歌舞伎という新しい芸能と結びつき、さらに江戸庶民を中心に普及するようになる。さらに不動尊の扮装をした役者が演目に登場したり、出開帳への参加をすることによって隆盛を極めるという全く異例の展開をみせてゆく。そして歌舞伎だけではなく、さらに能の謡曲(成田山)までも作曲され、上演されるというのである。前述のように貞の不動尊信仰の要因のひとつと考えられるのが成田山と市川宗家をはじめとする歌舞伎役者の関係である。初代市川団十郎は成田付近の郷土出身であり、成田山不動尊の靈験で子宝に恵まれたことをきっかけに、関係が深まり、市川宗家と成田山新勝寺を中心とする不動尊信仰に相互的な繁栄をもたらしたというものである<sup>8)</sup>。出開帳の際での市川宗家による餅撒き、不動尊の登場する芝居上演は、中世ヨーロッパにおいてキリストや聖人の靈験を表したミステリープレーの役割に近いものを果たしたのであろう。市川宗家が不動尊に扮装して登場すると、舞台にお賽銭が大量に投げ込まれたという。不動尊の登場する芝居の最も著名なものとしては『成田山分身不動』があったが、注目すべきは、数々の他の演目でも不動尊に扮して市川宗家が現れたこと、そしてそれと共に不動尊に纏わる古典や伝説に取材した靈験が錦絵として流布していたこと、そして先程述べた絵馬の奉納は、このような民衆信仰を如実に反映しているであろうということである。

絵馬とは元々本当の馬などの家畜を神社に寄進する経済力のないものが馬の絵を奉納したものから始まったという。しかし、後世では馬より祈願成就にまつわる絵馬の絵や文言が大きな意味を持つようになった。神仏混交で神社仏閣ともに絵馬を掲げるようになったのはいうまでもない。江戸の民衆の間に信仰が広まるにつれ、奉納される絵馬の数は増大した。絵馬の奉納者に有名人が多ければ多いほど、成田山新勝寺の信徒の獲得に繋がった。かつては成田山新勝寺の額堂に飾られ、現在靈光館に保管されている絵馬の題材は17種類に分けられている(大野政治, 小倉博, 1979)<sup>9)</sup>。ここで絵馬を(動機付け)という面から見た場合、大きく分けるとⅠ)祈願の目的の絵馬とⅡ)祈願成就のお礼参りに信心の証として奉納し、靈験を披露する目的の絵馬があるといえる(表1)。堂羽目は認証を目的とした発願と祈願成就に際しての奉納される絵馬に近い性格のものと分析できないだろうか。

深川の永代寺には元禄時代より度々成田山新勝寺の出開帳があったという。そして役者びいきであった貞奴も義母の教えや生家の影響もあって、不動尊に親しむうちに、義母が大病を患った際に、治癒した頃から信仰が本物になったのであろう。貞奴は二宮金次郎や他の靈験を享受した人々のように願いをかなえてもらったとその時実感できたと思う。

この様に民衆的な娯楽(歌舞伎)と江戸庶民の現世的利益や救済を求める切実な思いを受け止める不動尊信仰とは結びつきながら、互いを強化していった。貞奴八靈験図は絵馬に近い性格のものである。しかし貞奴としては絵馬以上の格付けのものを配置しなかったのである。

Table 1. 動機付けによる絵馬の分類

|  |  |
|--|--|
| I. 発願の絵馬:家内安全, 商売繁盛, 厄払, 心願成就  |  |
| WHO 祈願する人は自己の実績や存在を神仏信徒に宣伝し, 信徒の一員として認証してもらう意図がある. 氏名出身, 肖像/職業, 生業などを表すモチーフを印す | 例:火消し, 行列の絵(記録)/鉄砲打ち, 鉄砲試し打ち(記録:銃弾や弾痕)/役者は役者絵(記録)/両替屋は貨幣(記録) |
| WHEN 神仏に対してのお参り, 奉納や祈願の行為を記念する   | 例:家族絵, 講中絵/お布施の金額を明記/道中(風景)など                                |
| WHAT 祈願をする人は神仏に何を願うかを明記  | 禁断等の箇条書き/獲得したい性質の表現(剣, 動物など), 技芸上達や生業の繁盛を願い, 生業に使う道具などを飾る    |
| II. 祈願成就:お礼参りの参拝に際する奉納絵馬   |  |
| WHAT 信徒は神仏の靈験に対する感謝の念を表現し, 同時に靈験を披露し, ご利益を他の信徒及び部外者に広めてく返礼)する                  | 具体的に名乗りでる/靈験を証明するために物語を披露する(絵や実物など)/さらなるご加護を要請する             |

## 8. 阿弥陀来迎図と祈願成就の絵馬—靈験と自伝の融合

まとめてみよう。貞奴八靈験の堂羽目の性格は奉納行為の記念、つまり貞照寺の縁起、靈験の披露という性格が一番強い動機付けのように思えるが、それは表面的なことであって、実は一番深い動機は彼女の社会的役割に関する部分と考えて良い。

貞奴八靈験には貞奴の役者姿や、芸者姿は直接表れない。しかし人生の伴侶と共に享受した靈験については語っている。また、最後の靈験であるダム事業達成の木彫り堂羽目の構図は絵馬の家族礼拝図10で示すように不動尊を拝み奉る信徒の構図に酷似している。それらの比較的安価なバージョンでは稚拙で肉太な筆致で板絵に描いているが貞奴の〈絵馬〉は高価な浮き彫りであり、彼女の今置かれている事業主としての裕福な立場について雄弁に語る。

このように貞奴の思考は現世における救済の希求と救済に対する感謝で貫かれ、大衆的な部分と超越した冷徹な部分とに分かれていた。山口玲子氏などの指摘するように貞女としての親・夫に尽くした女の姿はあっても、社会に華々しく活躍した女優や世間のスキャンダルや注目の的となった才色兼備の女優貞奴の姿は印されていないかのように見える。しかし実は、その逆であると私は考える。堂羽目に女優としての姿を彫り付けなかった雄弁な謙遜こそが、そのような事を自慢するのが女性らしからぬという坪内逍遙などの論調-即ち貞女の鏡に従っているようにも見える<sup>11)</sup>。そして貞奴があらゆる意味で人間、そして女性として感じた無念を表しているように思える。貞女ならぬ貞奴の無念、それは多くの女性が感じている無念ではないだろうか。彼女は思い出の品々を貞奴縁起館に収めた。

しかし貞奴の偉大さはそこで終わらない。彼女は既成の枠組みというものにある意味ではしがみつina ながら、ある意味では利用し、生活してきたのである。彼女は一方では、新派という演劇の成立にプロデューサーの伴侶として、そして女優としてかわりながら、一方では古い演劇芸能である歌舞伎に深い関りを持つ成田山不動尊に信仰を捧げた。一方では音二郎との結婚により芸者という身分に決別し、また音二郎との協同作業のなかで新しい身分である女優という部族の先駆者の一人となった。彼女は全てを一新することはできなかつたし、破壊する力もなかつた。彼女は中間の人であり、なおかつ革命の人であった。

## 9. アイコンを着る

明治34年の福沢諭吉の死後、桃介は急速に貞に近付いていったという。明治44年(1911)音二郎の死後大正7年(1918)同棲するようになった。そして堂羽目板八番目の場面通り、名古屋の〈二葉御殿〉での貞奴の手腕に助けられ、木曾水系ダム造成事業は一段落し、桃介は中部地方の電力事業の基礎を築いた。とこ

ろが事業も一段落した頃、桃介は発病し、危篤となる。そこで福沢諭吉の娘で本妻の房や息子達のいる東京自宅へ戻り、二葉御殿を引き払う。貞もまた養子の川上富司一家と東京に引き払うが、桃介と死別後牛込川田町で空襲に会い、着のみ着のまま脱出した。

川上家に残った数少ない服飾遺品を熟覧すると、着衣にも多くのアイコンが仕込まれていることに気づく。1寸法から推測すると貞は小柄だったことがわかる。桁丈66cm、着丈155cmと150cm以下の身長であったと想定される。自分で描いた帯や襦袢、選り澄ました吉祥文様を紋縺子に複雑な友禅手法で染め付けさせ、上着、中着、下着と揃えた礼装の濃紺の九枚笹の紋の入った松樹文の留袖。染織手法には友禅、普段には緋、江戸小紋などがある。最も目立つのは貞奴の三重の生活を示す家紋の使い方だ。

妻そして未亡人としては川上家の〈九枚笹〉、福沢家権妻としては〈割り楓〉、どちらでもなければ替紋で、紅葉に川上を現わす川の流れを配した〈龍田楓〉である。「瀬をはやみ巖にせかるる滝川の、われても末に逢わんとぞ思う」のごとく、巧みに桃介の実家岩崎をも暗示しているのであろう。これらの遺品に染め抜かれた家紋を見る限り、人生の伴侶、身分や帰属に対する痛切な気持ちの揺れが、女人歌舞伎禁制後初の女優と謳われる貞奴にはあった。貞は桃介を桃と楓、自分を流水紋と楓、そして川上音二郎を流水紋やアルファベットのKで表した。貞照寺の紋章は二つ割り丸紋に葉付き桃であった〈2000:6月 フィールドワーク〉。貞奴は桃介を桃と笹、自分を紅葉と笹そして背景に音二郎をあらわす流水を配した帯などをつくらせている。そして二葉御殿での展示もあるとおり、葉付き桃は川上児童楽劇団ゆかりの記章である。入佛式に作成された映画をみると貞照寺の落慶の時には、向い笹の福沢家家紋を付け、喜々として行列の先頭にたつ貞奴―桃介は出席しなかった。寺の別称を貞照寺に対応させて桃光院ともいったようで、葉付き桃の丸文の紋章を使用した。

## 10. 二葉御殿にちりばめられたアイコン

二葉御殿についてはもう一つのステイトメントと見る事ができるのかもしれない。名古屋市内榑木町にふたりの共同本営〈二葉御殿〉が再築されている。名古屋市都市計画課に問い合わせたり、2002年10月20日白壁町三丁目出来町通り界隈の美容院で直接取材してみると、いまやその館の跡(現・白壁町3丁目10番地)は跡形もなく、駐車場に変わっている。北側はやや急な斜面、南側は西側に向かってなだらかに下る地形である。白壁町3丁目は西側を南北に走る名古屋市の環状線が区切っている。この古い町名は東二葉町であった。二葉御殿は榑木町三丁目二十三番地の芝生の植え込みのある地所へ移築された。当時この名古屋城近くの武家屋敷の影の色濃い街に洋館を建てることの意義は勿論新進先取気鋭の風潮を現すためにはぴったりであったにちがいない。その上桃介は外車を使用したという。

アールヌーボー様式を取り入れたこの洋館建では特徴的なマンサード屋根にはかなり目立つオレンジ色の瓦を用いている。正面玄関横には内陣風出窓が半円錐形のとんがり帽子の屋根を冠している。玄関を経て大広間に入るとすぐ目に飛び込む〈床の寄せ木細工〉、見上げての〈折り返し楕円階段〉、そしてアールデコの鋳物〈アイロンワーク〉の電燈飾りのある欄干―貞奴が大活躍した1900年パリ万国博覧会でも光学宮とその電飾は観衆を圧倒したにちがいない<sup>12)</sup>。そして桃介の電力王の意地をみせる怪異な分電盤。しかし何よりも注目に値するのは堂羽目に好対象をなす数箇所にしつらえられたスタンドグラス―まず玄関横、そして書斎、そして客室。客室には花鳥風月の題材、二階書斎横には南アルプスの風景、そして貞奴の替紋の龍田楓がモチーフとしてあしらわれる。

玄関横のミュージアのスタンドグラスは特筆すべきだ。ゼウスとムネモシユケ(記憶)の娘であり、芸術・知識・靈感・詩作を司る9人の女神たち。持物から推定すると、フルートを持つのは抒情詩の女神エウテルペ、竖琴を持つのは独唱歌を掌るエラト、そしてシンバルを持つのはまさしく合唱歌舞を掌るテルプシコーレ―よく注意してみれば、ミュージアの着衣は古代ギリシャの衣裳らしからぬ着物の打ち合わせとはだけた間着が見えることに気がつく<sup>13)</sup>。つまり、テルプシコーレは貞奴の先祖なのである。

芸者や女優はミュージア、巫女、白拍子の系統を引くものであり、伝統文化の継承者であり、芸術と靈感を掌るものである。



## 11. 女優第一号貞奴のステイトメント

さて、結論からいうと貞照寺は貞奴が遺した最もまとまったステイトメントであることに変わりはない。確かに彼女は常にスキャンダルの種になり、その頃うぶ声を挙げたばかりのマスコミの好餌となった。同時に貞奴は人々を魅了し、人々の夢や心を誘った。彼女は自分の人生の意味を理解していたので、そのまま世間様には受け入れ難い部分もあることも承知していた。誤解を恐れて語らない、あるいは隠蔽する部分もあったのも無理もない。彼女はまた、差別や偏見が理不尽であることも自分自身がそのように差別される立場にあったから良く知っていた。だから、逆に世間の偏見を利用したり、先入観を利用する事に対する罪悪感もより少なかった。

成田屋と称して堂々と不動尊の御加護を獲得できた市川宗家と貞奴の立場は違う。彼女の立場はあくまでも傍流であり、正統派ではない。ダブルスタンダードに苦しめられる女優としての自分—自らの偉業、身分に関する疑念をうちけすための記念碑が菩提寺貞照寺・墓所であった。しかしその表現は「女らしさの形」の内在化を示している。二葉御殿での西洋図像や様式の折衷と融合は自分の体験の大きさを雄弁に、したたかに表現し、貞の先進性と芸術・芸能至上主義を証明する。彼女の墓所は一つがいの干支(羊)と弥勒菩薩の立像に見守られている。



Fig. 7. 二葉御殿玄関前よりみたステンドグラス

## 引用文献

- 1) 二十四孝については黒田章、『孝子伝の研究』、佛教大学鷹陵文化叢書 5、京都市、思文閣出版、pp.63-128(2001)が詳しい。新勝寺釈迦堂両折棧唐戸 二十四孝 配置解説例を添える。

|             |    |    |    |    |     |    |     |     |    |    |    |     |    |    |    |     |    |    |     |    |    |    |    |
|-------------|----|----|----|----|-----|----|-----|-----|----|----|----|-----|----|----|----|-----|----|----|-----|----|----|----|----|
| 閔損<br>(閔子騫) | 王祥 | 王裒 | 呉孟 | 陸績 | 黄山谷 | 黄香 | 朱寿昌 | 漢文帝 | 大瞬 | 郭巨 | 楊香 | 唐婦人 | 姜詩 | 曾參 | 孟宗 | 老莱子 | 董永 | 丁蘭 | 庾黔婁 | 不明 | 不明 | 蔡順 | 剡子 |
| 西扉          |    |    |    |    |     |    |     | 北扉  |    |    |    |     |    |    |    | 東扉  |    |    |     |    |    |    |    |

- 2) Masako Shikida, *Das Bilddenken am Verduner Altar*, Bonn, Universitaet Bonn(1987)
- 3) 佐和隆研, 「日本に於ける不動明王とその展開」, 仏教芸術, 12, pp.14-49(1951)
- 4) 大野政治・小倉 博, 『成田山新勝寺の絵馬』, 成田山史料館, 資料図録第2集, 千葉県成田市成田山史料館(霊光館), pp.14-15(1979)
- 5) 大本山成田山新勝寺, 『成田山まいり:絵草子シリーズ③』, 大本山成田山新勝寺, ページ記載無し(年

(森田)

代不詳);小倉 博,『浮世絵』,成田山雷光館,資料図録第4集,大本山成田山新勝寺成田仏教研究所, pp.33-35(1986)に掲載されている

- 6) 大岸佐吉,『祈りの仏師小川半次郎の生涯』,春秋社,東京, pp.87-95(1989)
- 7) 大岸佐吉,『祈りの仏師小川半次郎の生涯』,春秋社,東京, pp.96-123(1989)
- 8) この点に関して旭寿山の『成田山靈験記』,或いは元禄期の『成田山分身不動』の再演についての研究がある。旭寿山,『成田山不動靈験記?市川団十郎と名優たち』,成田山選書5,千葉県成田市大本山成田山新勝寺成田山仏教研究所(1991);成田山新勝寺,『興教大師八百五十年御遠忌記念元禄歌舞伎再興『成田山分身不動』』,千葉県成田市大本山成田山新勝寺(1992)
- 9) 馬,不動明王,靈験,歌舞伎,芸能,武道,武者絵,物語絵,風景,生業,風俗,動物,算額,祈願成就,禁断,書額,その他の17種類に分類している
- 10) 大野政治・小倉 博,『成田山新勝寺の絵馬』,成田山史料館,資料図録第2集,千葉県成田市成田山史料館(靈光館), p.58(1979)
- 11) 坪内雄蔵,「女優問題に就いて」,『婦女新聞』,8月19日,明治43年(1910)
- 12) 「川上音二郎と1900年パリ万国博覧会展」実行委員会,『川上音二郎と1900年パリ万国博覧会展』,福岡市,福岡市立博物館, p.50(2000)
- 13) 第184回意匠学会研究会例会<2005>での横川公子氏の発言

#### 参考資料

- 1) 金尾種次郎編,『川上音二郎欧米漫遊記』,金尾文淵堂,大阪市(1901)
- 2) 金尾種次郎編,『川上音二郎貞奴漫遊記』,金尾文淵堂,大阪市(1901)
- 3) 山口玲子,『女優貞奴』,新潮社,東京(1982)
- 4) 白川宣力,『川上音二郎・貞奴—新聞にみる人物像—』,雄松堂出版,東京(1985)
- 5) 成田山貞照寺,『しおり:貞奴と貞照寺』,年代不詳